

青
營
山

白路叢書第七十五篇

歌集
青菅山

歌集 青菅山 白路叢書第75篇

昭和63年5月5日発行

著 者 若 浜 汐 子

〒167 東京都杉並区桃井3-2-12

発 行 者 石 黒 清 介

印 刷 所 日 本 文 芸 印 刷

製 本 所 菊 川 製 本

発 行 所 短 歌 新 聞 社

〒166 東京都杉並区高円寺南 4-43-9

電 話 (03) 312 - 9185番

振替口座 東京 5 - 21683番

定価 2500円

は
じ
め
に

本書は私の第九冊目の歌集である。前著「旅ゆけば」以後の約六〇〇首を収めた。

第一歌集「日本琴」以後約四十年間の作歌の歩みをかえりみて、この道のいよいよはるかなることを痛感するのみである。

想えば幼年八歳、鎌倉扇ヶ谷の要山に住んでいたころ、海上胤平翁の門人海上ひさ子女史を師として作歌の手ほどきをうけたことは、その後の七十余年の私の人生に、大きな導きとなつて今日に及んだ。そののち住居を変えることいく度、私の人生行路もあやのように入り乱れ、歌作ること一つの救いを求めることしきりであった。昭和に入って古代文学、特に万葉集への憧憬やみがたく、武田祐吉先生・森本治吉先生の門に学ぶ幸

運にめぐりあった。

森本先生は久松潜一門の学者であり、又島木赤彦・齋藤茂吉門のアラギ派歌人である。そして、私の幼い日の夢、作歌へのあこがれは、この森本先生の門において厳しい修業の道となり、戦前戦後の険しい世に、自分の力をつくしての修練の日となった。そして、師の没後、師にうけた作歌の道を専らに歩みつづけて今日に及んだが、今の己の作歌をかえりみ、額に汗することいく度かである。

しかし、およそいづれの道においてもその究極に達するといふことはなまかなことではありえないと思えば、作歌の道も亦同じであらう。

今後、いくばくかの生がゆるされなればそこに、自分の作歌の力を注いで、生涯唯の一首でもまことの「己が歌」を作りた
いものと心に願ってやまない。

若 浜 汐 子

目次

はじめに

風 飄々

風

貝は鳴る

孟蘭盆の頃

この夜の学び

飯島輝子夫人を哭す

庭の若芹

山口家の一夜

早春賦

氷 塊

茶房の灯下

三

六

二〇

三

二六

元

三

三

四〇

四三

べにばな

小野昌繁氏を悼む

受診票

仔猫

車内

赤児は泣く

花の唇

靱彦描く王昭君

蠟燭

凍夜一章

夜更の投函

移り行く花

哭

舌

唇

弄

弄

空

壳

兰

壹

片

三

最終講義の日	六
停年退職	八
土の小鈴	三
猷火	六
鷺草	九
病重し	三
縋帶の身にて	六
除夜過ぎぬ	二〇
己未新春	二三
早春哀歎	二六
土匂ふ	三〇
禅院花の艶	三三
酷熱日夜	三六

新 秋

二〇

三 宝 寺

二三

萩の坂

凍る手

二五

夜 嵐

二四

総のくに晩夏

二四

荒 田

二四

萩の坂をりをり

二五

山園の昼

二五

胡蝶蘭

二五

花紅し

二六

朱線のあと

二六

かげろふ

二六

相剋の火

二七

眞夏日

二八

厨

二九

晩秋

三〇

新春感あり

三一

ポピー一輪

三二

椿落ちなむ

三三

遠木枯

遠木枯

三九

坑底百日

四〇

永別

四一

灯火無慘	三二
秒針	三四
春の交はり	二八
氷中の虫	三三
朝日焼名窯	三六
春菊にはふ	三〇
書庫の中にて	三四
高円山陵	三六
城沼秋色	三四
玩具佛心	三六
夏白し	二九
この幸	三五
歳晚所感	三五

青 菅 山

あ
を
す
が
山

